

ゼカリヤ書におけるメシア再臨の預言

1. 終末に与えられる神の祝福としての、「後の雨」 -ゼカリヤ書 10章1節~12節-

●ゼカリヤ書 10 章には、終末において神の民に与えられる祝福について預言されています。特に、冒頭の節は重要です。

【新改訳改訂第3版】10:1

後の雨の時に、【主】に雨を求めよ。【主】はいなびかりを造り、大雨を人々に与え、野の草をすべての人に下さる。

(1) 後の雨(マルコーシュ)の季節に大雨を求めよ

●「後の雨」とは「春の雨」とも言い、収穫の前に降る大切な雨です。その前に降る雨を「冬の雨」とも言います。「後の雨」に対比する雨として「先の雨」があり、こちらは夏の干ばつで固くなった地を柔らかくするために降る雨で、「秋の雨」とも言います。これらはみな季節になかて降る「祝福の雨」(エゼキエル 34:26)です。ちなみに、「後の雨」(春の雨)のヘブル語は「マルコーシュ」(מְלֶקֶשׁ)で3月から4月にかけて降る雨を意味します。使用頻度は8回(申命 11:14、ヨブ 29:23、箴言 16:15、エレ 3:3/5:24、ホセア 6:3、ヨエル 2:23、ゼカリヤ 10:1)です。別名「終わりの雨」とも言います。これに対して、「先の雨」(秋の雨)のヘブル語は「ヨール」(יֹרֵה)で、3回の使用です(申命 11:14、エレミヤ 5:24, 24)。10月の後半から12月の初め頃まで降る雨を意味します。別名「初めの雨」(「モーレ」מֹרֶה)とも言います。

●エゼキエル書 34 章 26 節の「祝福の雨」は、「先の雨」と「後の雨」を含めたものを意味しますが、ヘブル語では「ギシュメー(גִּשְׁמַי)・ヴェラーハー(בְּרִיחַ)」、英語では showers of blessing です。ここでの「祝福の雨」の「雨」は「ゲシエム」(גִּשְׁמַי)の複数形「ギシュメー」(גִּשְׁמַי)ですが、この語が単独で使われると、単数でも「大雨」と訳されます。ゼカリヤ書 10 章 1 節の「大雨」は「ゲシエム」です。「ゲシエム」(גִּשְׁמַי)は 38 回使われていますが、最初に出て来るのは創世記 7 章 12 節です。ノアの洪水のとき、天の水門が開かれて、大雨が 40 日 40 夜降ったとあるように、巨大な水の源がごとごとく張り裂けて降った雨が「ゲシエム」です。ここでは神のさばきとしての「大雨」でしたが、ホセア書 6 章 3 節では祝福の雨として「大雨のように」「降り注ぐ雨のように」と表現されています。新約ではこの「大雨」を、聖霊の傾注の象徴として用いられます。

●ゼカリヤ書 10 章 1 節の「雨」と訳されたヘブル語は「マートル」(מָטָר)で、旧約では 38 回使われています。「ゲシエム」と比べるならば量の少ない雨を、あるいは一般的な意味としての「雨」を意味します。「後の雨」が降る時に「雨」を求めるならば、主は稲光を造り、大雨を人々に与えるという約束が預言されています。

(2) 終わりの日に注がれる聖霊の祝福の預言(ペンテコステの祝福は二度ある)

●ヨエル書 2 章 23 節にもこうあります。「シオンの子らよ。あなたがたの神、【主】にあって、楽しみ喜べ。主は、あなたがたを義とするために、初めの雨を賜り、大雨を降らせ、前のように、初めの雨と後の雨とを降らせてくださるからだ。」と。

●「初めの雨(秋の雨)」はすでに二千年前のペンテコステに降りました。しかし大収穫の「後の雨(春の雨)」はまだです。これが降るときは第二のペンテコステということが出来ます。大艱難時代の終わり頃に、第二のペンテコステによってイスラエルの民は民族的に覚醒して救われ、その後キリストの再臨がなされて千年王国がやってきます。その前には、すでに主にあるクリスチャンたちは空中に携挙されていますが、ユダヤ人の民族的救いの実現なしには異邦人クリスチャンの救いの完成もないのですから、無関心でいることはできません。イスラエルの民(字義的にはユダヤ人)が民族的に神に立ち返って救われることとキリストの再臨とは密接な関係をもっています。私たちはその意味で、ヨエル書の言う「後の雨」が注がれることを祈り待ち望まなければなりません。またゼカリヤ書 10 章 1 節にあるように、「後の雨の時に、主に雨を求め」なければならないのです。なぜなら、主はイスラエルの民とイスラエルの地に大雨を降らせて、大いに祝福してくださるからです。「雨を求め」ということは実質的には神の国の収穫を求めることなのです。

●異邦人クリスチャンの復活と空中携挙もユダヤ人たちの救いと密接にかかわっているからです。異邦人クリスチャンはユダヤ人に接ぎ木された存在であることを忘れてはならないのです。

2. 民族的回心をもたらす「恵みと哀願の霊」 -ゼカリヤ書 12 章 1 節～14 節-

●ゼカリヤは、捕囚から帰還したユダの人々に神殿の再建の希望を与えて、力づけるために起こされた預言者ですが、与えられた主のメッセージは単なる神殿建設にとどまらず、神の栄光のご計画のマスタープランを示す預言を含んでいました。終わりの日に起こる多くの出来事が、時間軸ではなく(時間的順序)ではなく、二次元のピクチャーを同時に見るような形で語られています。それゆえ、私たちはその出来事を時間軸で理解するためには、他の箇所と照合させながら、それらが符合する形で理解していく必要があります。

ゼカリヤ書 12～14 章には、イスラエルの民がどのようにしてメシアを受容するかが語られています。

(1) 「その日には」という語彙

●「その日」と訳されたヘブル語は「ヴァヨーム・ハフー」で、正確には「その日に」という意味です。ギリシア語の「カイロス」のように、終わりの日に起こる定められた時を意味しています。旧約ではこの表現は 338 回使われていますが、ゼカリヤ書は 26 回。そのうち 17 回が 12～14 章にあります。12 章では、3, 4, 6, 8, 9, 11 節にあります。それぞれの「その日に」起る事を列記してみると以下ようになります。

- ① 3 節・・地のすべての国々がエルサレムに向かって集まる。しかしそれは彼らにとっては「重い石」となり、「ひどい傷を受ける」ことになる。

- ② 4 節・主は、エルサレムを包圍する国々の民のすべての馬を打って盲にする。
- ③ 6 節・敵は破壊されるが、エルサレムは安泰である。
- ④ 8 節・主はエルサレムの住民を守られ、彼らは立ち上って勝利する。
- ⑤ 9 節・主は、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、**恵みと哀願の霊を注がれる。**
その結果、彼らは、「自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、激しく泣く。」
- ⑥ 11 節・エルサレムでは、ひとり一人が悔い改め、民族的な悔い改めが起こる。

(2) 恵みと哀願の霊の傾注の預言

●12 章できわめて顕著なことは、イスラエルの民の上に聖霊が注がれて、悔い改めを伴う民族的回心が起こる事です。すでにメシア・イエシュアが復活して昇天された後に聖霊が傾注しています。それによってメシアニック・ジューと異邦人とからなる「教会」(エクレシア)が誕生しましたが、再度、終わりの日に聖霊が傾注されるその目的は、神の民であるイスラエル(ユダヤ人)が民族的に回心するためです。

●反キリストによる大患難をくぐり抜けた 1/3 のユダヤ人は、キリストの再臨の前に、聖霊の傾注によって、「自分たちが突き刺した者(イエシュア・メシア)」と「主を仰ぎ見」て、主とメシアが一体であったことに霊の目が開かれます。そして、メシアを拒絶したことがどんなに大きな罪であったかを示されて「激しく泣く」のです。つまり、尋常ではない「苦しみを伴ったひどい悲しみ」となります。そうした民族的回心の後に、キリストは再臨されるのです。

●ちなみに、10 節のみことばの直訳は以下の通りです。

אֲשֶׁר־דָּקְרוּ	את	אֵלַי	וְהִבִּיטוּ
彼らが刺し通した	ところの者	わたしに	そして彼らは目を留める
(דָּקַר Qal 完 3 両複) 関係代名詞		(בָּטַט Hif 完 3 両複)	

※「わたし」である主と、彼らが刺し通した者と同格として表わされています。

(3)エルサレムは周囲の諸国をさばく「よろめかす杯」「重い石」となる

●「エルサレム」また「ユダ」は、反イスラエルの諸国に対して「よろめかす杯」となり、また「重い石」となることが語られています。「よろめかす杯」とはぶどう酒に酔ったように役立たずの国となる事を意味し、「重い石」とは、それを持ち上げようとして、逆にその石によって大傷を負うことを意味します。過去の歴史において、世界の諸国は神の民イスラエル、あるいはエルサレムに対して取った態度によって神のさばきを受けて来ました。エジプトのパロ、ペルシアのハマン、ギリシア(シリア)のエピファネス 4 世、ナチスのヒトラーなどです。そして終わりの時には、サタンの子である獣(反キリスト)もさばかれます。神はご自身の民が選民としての使命に目覚めさせるために、主権をもってこうした敵を用いられています。そしてそれらの敵をことごとく滅ぼされま

す。

3. その日、主の足はオリーブ山の上に立つ —ゼカリヤ書 14章1節～21節—

●ゼカリヤ書 14章は最も心踊らされるエキサイティングな箇所です。13章8節の「全地はこうなる」というフレーズが引き続いて、14章でも継続されて、やがてイスラエルの民の民族的回心によって、メシアが到来して実現するメシア王国の預言的眺望が記されています。ここに記されていることはこれからのことです。特に、「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山に立つ」との預言は、キリストの再臨の預言であることは明白です。14章に記されているキリスト再臨の前後に起こる出来事をまとめてみたいと思います。

(1) ハルマゲドンの戦い(1～3節)

●「見よ。主の日が来る。」(1節)の「主の日」とは、今の世と後の世を分ける日であり、主が天から来られてこの世に対する審判が行われる日、すなわち、大患難時代の終わりに起こる出来事です。具体的には「ハルマゲドンの戦い」です。「ハルマゲドン」ということばはありませんが、内容としてはこれまで何度も語られてきたように、反キリストの軍勢とキリストの軍勢による最後の決戦です。しかも舞台はエルサレムです。

●2節「わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる」とあります。主が諸国の民にエルサレムの攻撃を許しているのは、イスラエルのかたくなな心と偽メシアを受け入れた大罪のゆえに、試練の火の中を通させることで彼らの霊の目を開かせるためです。

●かつて彼らはメシアが二千年前に来臨された時に、その方を拒絶し、十字架につけるという大罪を犯しましたが、終わりの日には、偽メシア(反キリスト)を真のメシアとして信じて歓迎するという大罪を犯します。偽メシアとの平和条約を結び、平和が到来したことを喜んでいるその矢先に偽メシアに裏切られ、一転して大患難という民族存亡の危機(ヤコブの悩みの時)に陥ります。最後の砦であるエルサレムも占領され、土壇場に追い込まれます。そのとき、彼らははじめて神に向かって必死の叫び声を上げて、真のメシアを求めようになるのです。イエスはかつて「祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」と、あなたがた言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」(マタイ 23:39)と言われましたが、そうした時が到来する時が来るのです。

(2) キリストの再臨と大地震の預言(4～5節)

① 主の栄光が戻る場としてのオリーブ山

●メシアが天から降り立たれる場所は、かつてイエスが昇天されたオリーブ山です(使徒 1:10～12)。そこはかつて神の栄光が神殿から離れ去った場所ですが、やがてそこに神の栄光が戻って来るとも預言されています(エゼキエル 43:2)。メシアが天から降り立たれる場所と神の栄光が戻ってくる場所が同じなのです。しかも戻って来る神殿は新しく建て直される第四神殿と思われれます。

●使徒の働き 1 章 10～12 節【新改訳改訂第 3 版】

- 10 イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。
- 11 そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」
- 12 そこで、彼らはオリーブという山からエルサレムに帰った。・ ・

●エゼキエル書 11 章 22～23 節【新改訳改訂第 3 版】 22 ケルビムが翼を広げると、輪もそれとっしょに動き出し、イスラエルの神の栄光がその上のほうにあった。

23 【主】の栄光はその町の真ん中から上って、町の東にある山の上にとどまった。

●エゼキエル書 43 章 2, 4 節【新改訳改訂第 3 版】

43:2 すると、イスラエルの神の栄光が東のほうから現れた。その音は大水のとどろきのものであって、地はその栄光で輝いた。

44:4 彼は私を、北の門を通過して神殿の前に連れて行った。私が見ると、なんと、【主】の栄光が【主】の神殿に満ちていた。そこで、私はひれ伏した。

② オリーブ山が二つに裂ける大地震

●現在のオリーブ山は、エルサレムの「神殿の丘」とよばれる「モリヤの山」より 95 メートルほど高いようです。しかしメシア再臨のときにはかつてない大地震が起こり、オリーブ山は南北に二分され、東の死海から、西の地中海へと大きな谷ができます。この地殻変動によって、エルサレムに包囲されていたイスラエルの民に脱出の道を開くこととなります。イスラエルの民はそこを通過して逃げることができるのです。そのようにして、14 章 2 節の「しかし、残りの民は町から滅ぼされない」ということが実現します。

③ 主はすべての聖徒たちとともに来る(5 節後半)

●エルサレムに包囲された民が助け出された後に、主は、すべての聖徒たちとともに地上に来られるのです。その箇所を原文で見ると以下のようになっています。

インマーフ	ケドーシム	コル	エローハイ	アドナイ	ウーヴァー
עִמָּךְ	כָּל-קְדוֹשִׁים		אֱלֹהֵי	יְהוָה	וּבָא
あなたと共に	聖徒たちが	すべての	私の神	主(が)	そして、来られる

●「すべての聖徒たち」と訳された部分を、口語訳は「もろもろの聖者」と訳し、新共同訳は「聖なる御使いたち」と訳しています。私見としては、おそらくこの両方が含まれていると考えられます。というのは、新約では「私たちの主イエスをご自分のすべての聖徒とともに再び来られる時」(I テサロニケ 3:13)とも、「見よ。主は

千万の聖徒らを引き連れて来られる。」(ユダ 14)ともあります。そしてまた「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき」(マタイ 25:31)という表現もあるからです。

●もし使徒パウロがいうように「私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られる」(Iテサロニケ 3:13)とするならば、この「聖徒たち」とはいったいだれのことでしょうか。それは、主によってすでに空中に携挙された者たちであると解釈するのが自然です。

●このことに関連して、ヨハネの黙示録 3章 10節に「あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」(新改訳)とあります。「試練の時には」と訳されていますが、ここはギリシア語の「エク」(ἐκ)が使われており、「あることから救出される」「~の中から救い出される」というニュアンスがあります。つまりこの箇所は、大患難という事態に先立って、神がご自身に属する民を安全な場所へ移されるということが示唆されていると考えられます。ということは、キリストの空中再臨によって携挙されるということです。マタイの福音書 24章 37～42節のイエスの言葉もそのことを裏付けています。

【新改訳改訂第3版】マタイ 24章 37～42節

37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。

38 洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついでりしていました。

39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。
人の子が来るのも、そのとおりです。

40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。

41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。

42 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。

と同時に、この携挙によって「小羊の婚礼」がなされるとも考えられます(黙示録 19:7～8)。その後で、キリストの地上再臨の時に、キリストとともに地上にやって来ると考えられます。

●ゼカリヤ書 14章 5節の「すべての聖徒たちも主とともに来る」という預言は、主にある者たち(初代教会のメシアニック・ジューの人々、そして異邦人のクリスチャンたち)の立ち位置についても預言されていることになります。主にある私たちは確実に、キリストとともにこの地上に実現されるメシア王国、すなわち千年王国で生きる者とされるのです。携挙における喜びもさることながら、地上再臨において主から信任されてこの地上を支配する喜びに預らせていただけるのです。まさに心踊る預言です。

(2)メシアの王国(千年王国)は人間の想像を越えた世界(6～8節)

① 昼も夜もない「ただ一日の日」

●メシアの地上再臨によってもたらされる新しい世界(千年王国)は、人が想像し得ないような世界です。夕暮れ時にも光がある」(7節)とあるように、常に光が照らされており、夜がないからです。

●今日のテゼ共同体で出版されている本に「来てください。沈むことのない光」(初期キリスト者のことば)があります。初期のキリスト者は「沈むことのない光」であるメシアを待ち望んでいたことがわかります。つまりメシアの再臨による王国の到来は、神の臨在の光に包まれる時代として描写されているのです。メシアによって到来する千年王国のシャハイナ・グローリーは、主の光、天からの光、恵みとまことの光、信仰の希望の光、愛といのちの光、永遠の光なのです。それを主にある者たちが、大患難の試練をくぐり抜けて純化されたイスラエルの民とともに、この地上において経験できる時が来るのです。そのことを知ること、御国に対する揺るがない希望をもっていることができるのです。

② 神殿から流れ出るいのちの水はすべてのものを生かす

●8節の預言も想像を越えた世界です。エルサレムはこの時代には地震による地殻変動によって最も高い山となります。そのエルサレムの神殿(第四神殿)の敷居から流れ出るいのちの水については、エゼキエルも47章で預言しています。この水は生ける水の源である神ご自身から湧き出るいのちの水です。この水が流れ出るところでは、すべてのものが生かされるのです。

●エゼキエル書47章によれば、このいのちの水は東に向かって流れて死海に入り、多くの種類の魚が住むようになると預言しています。ゼカリヤ書ではこの水は西の地中海にも注がれることが示されています。いのちの水がエルサレムの神殿から流れ出るだけでなく、同時に、イザヤによれば、「すべての国々がそこに流れて来る」ことが預言されています。それは、「シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るから」です(イザヤ2:3)。ヤコブの家も、そして異邦人の主にある者たちも「主の光に歩む」ようになるのです(同、5節)。そのような世界が来ることへの期待をますます新たにしたいものです。